
私はOLが嫌い（仮）

浅井 健二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私はOLが憎い（仮）

【Nコード】

N3403P

【作者名】

浅井 健二

【あらすじ】

「私はOLが憎い……」

そう言って、OLへの復讐を決意した小池課長。

復讐の内容はOL達に無理やりラジオ体操を躍らせるというものだった。

30年以上童貞の小池課長には人を念じて好きに動かせるという超能力がある。

そして、小池課長に賛同し、協力する62歳、童貞の掃除夫、ヒトラー。

僕は、正義の童貞であるために、二人の復讐を阻止し、OL達を守ることを決意した。そうして、超能力者とのバトルに巻き込まれることになる。

第一話

「私は〇しが増い……」

小池課長は、ブラインドに指を入れ、かちやりという音とともに、三センチほど押し下げた。そして、外を見下ろすようにして言った。この会議室からは建設中の東京スカイツリーがぼんやりと見えるはずだ。今は夕闇に覆われているが、昼にはおよそ百キロ先の富士山が見えることもある。もつともこの東京で、そこまで空気が澄むことは年に数日しかないのだが。

僕達のいる三〇階、小会議室の空気はしんと静まりかえり、時計の秒針の動く音だけが聞こえている。僕は何とはなしにそれに目をやった。短針は七の文字を少し追い越している。七時か……。昼間のざわめきが嘘のようだと思った。部屋の中には六人掛けのテーブルと、六脚の椅子。それだけで室内のほとんどのスペースを占めている。

僕からは小池課長の表情は見えないが、明るいものではないだろう。静寂の中、僕は次の言葉を待ったが、小池課長は黙ったまま外を眺めている。

「〇しが増い……ですか」空気の重圧に押されたように小池部長の言葉をリフレインする僕。憎いという言葉。もしかしたら生まれて初めて使ったかもしれない。人が、人を憎む。そういう感情があることは当然知っているが、日常の中で誰かを「憎い」と思うことがあるだろうか。少なくとも僕にはそんなに強い気持ちはない。

「ああ」

短い返事の後、小池課長は繰り返した。「私は〇しが増い……」

声は力なく発せられたが、その言葉に込められた思いは深く、そして、まがまがしく感じられた。

「一体何があつたんですか？」

「お前にそれを聞く勇気があるのか？」

つまりは聞いてほしいということだ。僕には選択肢はない。一言「はい」とだけ返事をした。そして、聞くことだけで何かの救いになるのなら、聞いてあげたいとも思った。

小池部長は「ふっ」とひとつ息を吐き一瞬の沈黙の後言った。

「今日は何日だ？」

「今日は二月一五日です」

「昨日は何日だった？」

その質問に思わず息をのんだ。おそらく僕にとっても避けたい話題であることが想像できたからだ。

「二月一四日です」

「二月一四日は何の日だ？」

小池課長の問いに僕は言葉を詰まらせた。二月十四日。一年でかくも恐ろしい日があるだろうか。男を貰える者と貰えない者に分ける審判の日。普段幸せなふりをして暮しても、俺は充実していると嘯いても、貰えなければそこでおしまいだ。人生を楽しんでいようが、社会の役に立つ仕事をしていようが、金があるうが、貰えなければ落ちこぼれ。出来そこない。雑魚。石ころ帽子を被ったのび太。弱者。悪。現実を突き付ける絶望の冬の日。そしてそれはこの命が続く限りやってくる。逃げ場はない。だからこそ僕は自分の魂を守るために、そんなアニバーサリーの存在は意識から抹消し、あらゆるそれにまつわる情報、テレビや雑誌を避け、ふと耳に入ったら意識的にシャットアウト。攻撃をなかったことにしてやり過ごすようにしている。まるで燃え盛る炎の上を裸足で歩く荒行のようだ。炎なんて存在しない。存在しないから熱くない。本当に熱くないのか？熱いに決まっている。皮膚は焦げ、タンパク臭が鼻孔を襲う。これ以上、もう一步も歩けない。でも生ある限り歩かなければいけない。

「さあ、早く答えるんだ」小池部長が声を荒げた。

そして、僕を、悲しみをにじませた強い視線で見据える。

「バレン……タイン……デー」僕は思わず視線をそらせ、絞り出す

ように言った。まるで生傷に塩を刷り込むようだ。

「お前はチヨコレートをもらったか」

僕はそれ以上答えることができなかった。ただ、よろよろと椅子に尻をつき、頭を抱えただけだった。

答えは……NOだ。

「私は今年もチヨコレートをもらえなかったよ」僕の返事を待たずにそう言った小池部長の右目からは一滴の涙が落ちていた。僕はそれを見て口を半分開けたまま固まってしまった。この人は僕よりもよっぽど深い傷を受けている。

「もらえなかったんだよ。今年も……」

そう言つと、潤んだ瞳の中では、もはやまつ毛が堤防の役割を果たしきれずに、両の眼から大量の涙が溢れた。涙は頬を伝い、顎で交わり、のど元を通過、シャツへと吸収されていった。首から下げられたネクタイの中では、ペイズリイ達が楽しそうに踊っている。ダブルのスーツの肩パットは小刻みに震え、パーマでポリウームを増した髪もへなと垂れ下がっている。

「四十を超えた男がチヨコレートを貰えなかったくらいでこんなに落ち込んでおかしいだろう」小池部長は涙をぬぐおうともせずに僕に問いかけた。

「いえ、そのお気持ちはよくわかります」僕だってバレンタインデーにチヨコレートをもらったことは一度もない。

「ありがとう。丸山。だけどな、私の気持ちがわかるなんて軽々しく言わないでもらいたい」

小池課長との付き合いは五年になる。僕が会社に入ってからずっと直属の上司だった。最初は三五歳という年齢を聞いて驚いた。薄毛、髭面、じゃがいも顔。どこで買ったのかわからない茶色のスーツ。一言で言えば老けている。更に言えば、ブサイク。そして、イケてない。哀愁がある。もてなさそう。童貞っぽい。いい年をしてアイドルの追っかけをしていそうな雰囲気がある。おそらく一生結婚できなさそう。そんなにたくさんの印象を言葉として頭に思い浮かべ

たわけではないが、小池課長の外見にはそれらの負のメッセージがふんだんにちりばめられており、僕ですら自分のことを棚に上げて「うわっ」と思ってしまったくらいだから、若い女性であれば「うわっ」「どころか」「きつつう」と感じるかもしれない。

「今年のバレンタインデーは私が生まれてから四十回目のバレンタインデーだった」小池課長は再び窓のほうに体を向けた。

「私のこのスーツ。ネクタイ。靴。ヘアスタイル。全てはOLの目を意識して、もてようとして、バレンタインデーにチョコを貰おうとしてコーディネートしたものだよ。そしてそれらは全て無駄になったんだ。おかしいだろう」

おかしいかおかしくないかと問われれば確におかしかった。まず購入するセンス自体が明らかに誤っている。ペイズリイも肩パツトも逆に探するのが難しいくらい時代遅れで、この人の美的センスには時間の観念がないのだろうかと疑わしくなる。いや、疑わしいどころか完全にアウトだ。ウケ狙いにしてもギャグとして成立していないし、やっぱり完全にアウトだ。そして、たとえ時代があつていたとしても、小池課長のジャガイモ面には似合うものではない。もてようと思つてする行為全てが完全に、一ミリの疑いの余地もなくアウトだ。

「そしてな。私はこれまで、甘いものは苦手を通してきた。本当は好きであるにも関わらずだ。何故だかわかるか？」

僕にはその理由がよくわかった。

「普段から甘いものが苦手だと言つておけば、欲しくないから貰つていないと思わせることができるから。人に対しても、自分の心に対しても言い訳になるから」悲しい物語だ。そして、僕も人前では甘いものを口にしないようにしている。

「そうだ。しかし、私は思った。甘いものが苦手だと公言してしまつていてるせいで、本来貰えるチョコを、私自身の手で貰えなくしてしまつていてるのではないだろうか。本当は私にチョコを渡そうと思つていてるOLも、私に気を使つて渡さないのではないかと。そし

て、私は毎日デスクでお菓子を食べることにした。これは一つの賭けだった。もしここまでしてチョコレートが貰えなければ、私はチョコが好きであるにも関わらず、欲しているにも関わらず貰えなかった男になってしまふ。欲しくて貰えないのと、欲しくなくて貰えないのでは同じ貰えないにしても大きく違う。少なくとも私にとつては」

「そう言えば……」

ルック。ダース。ルマンド。ホワイトロリータ。これまで見たことのない甘いお菓子がここ数カ月小池課長のデスクに並んでいた。

「業務時間中にオフィスを見まわしながらお菓子を食べていたのは……」

「そうだ。アピールしていたんだ。私は甘いお菓子が好きなのだとそして、賭けには敗れたよ。残されたのはチョコも貰えず、言い訳さえも取り上げられた哀れな中年男だ」

小池課長はうるんだ眼をくわと見開き、天を仰いだ。両手の平はジャガイモ面と一辺三〇センチの正三角形を作り、その中心を向いている。そして、叫んだ。「笑いたければ笑え。笑うがいい」

僕は体制を変えず、静かに小池課長を見た。そのまなざしに、愛情、シンパシー、話を聞く真摯な気持ちがこもるように。そして、言った。

「僕は笑いません。先ほども言いましたが僕には小池課長の気持ちがわかります。決して軽い気持ちで同情したふりをしているんじゃないありません。実は僕もそうなんです」

「何がそうなんだ」

「小池課長と一緒にです。僕もバレンタインにチョコレートを貰ったことがあります。だから、小池課長の苦しみは僕の苦しみでもあります。さあ、涙を拭いて下さい」僕はそう言つて、数日前にポケットに入れた薄汚れたハンカチを差し出した。

「すまん。丸山」

そう言つてちらと僕のハンカチに目をやり、くしゃくしゃさ加減と

汚れ染みを見ながら少し考えて、結局は自分のハンカチを取り出して涙を拭いた。僕は少しだけ、親切を足蹴にされたような気分がしてもやもやしたけれど、それほど強く思ったわけではなかったのであえて何も言わなかった。

「やっぱりお前を今日呼んで正解だったよ」

「そうですか。お役に立てたようで幸いです。さあ……」飲みにも行きましようと言った僕が言いかけた時に、小池課長が「それで、ここからが大事なんだが」と、話をかぶせてきた。

「さっきも言ったが私はOLが憎い」

「ええ、お気持ちは充分わかります」

「それでな。私はOLに復讐することにした。お前も協力してくれ」会議室では相変わらず時計の秒針がコツコツと時を刻んでいた。

「本気ですか」僕は身を乗り出して小池課長の目を覗きこんだ。それが冗談であることを願いながら。しかし、小池課長の目には一点の曇りもなく、百パーセントの本気であることを物語っていた。その眼力が強すぎて僕は思わず目をそらした。そして腕を組んで視線を足元に向けつづやいた。

「一体どうやって？」

「OLが好きなものは何だ？」

OLの好きなもの。自慢ではないが、僕は普段からOLのことばかり考えている。だからそんな問いかけは孫子に戦の心得を聞くようなものだった。とっさにいくつものキーワードが頭に浮かぶ。

「スイーツ。イケメン。シャンプー。風呂。ムートンブーツ。ピンク色。ケータイ。デコケータイ」

「さすが丸山だ。じゃあ、逆に嫌いなものはなんだ？」

嫌いなもの。それもたやすい質問だった。

「ブサメン。オタク。肉体労働。ダサイ服。おっさんの説教」

第二話（仮）

嫌いなもの。それもたやすい質問だった。

「ブサメン。オタク。肉体労働。ダサイ服。おっさんの説教」

「ブラボーだ。実にブラボーだよ。どれもこれもコレクト。オールコレクトだ。そして、もうひとつ次元の高い抽象概念で言うならば。OLはダサさ、汚さ。うざさを嫌っているとも言える。全く高慢ちきで鼻もちならない連中だと思わないか」

僕は小池課長に同意しようにも、そこまで積極的にOLのことを悪く言う理由もなく、黙っていた。小池課長は構わずにしゃべる。もしかしたら僕の沈黙を同意だと解釈しているのかもしれない。

「小池ダンス」

不意に小池課長が発した言葉に僕は「えっ」と短い言葉で聞き返した。

「覚えているか。小池ダンスを」

小池ダンス。

記憶がフラッシュバックする。あれは一昨年の忘年会。各課でひとつづつ余興をしなければならぬことに決まり、僕の所属する総務課も、余興を何にするかでミーティングを開いた。ところ、通常一時間はかかるミーティングがその日は五分で終了した。小池課長が自信満々の体で「出し物は私が一人でやる」と言い放ったからだ。何をするんですかと聞いても、ふふふと不敵に笑うばかりで教えてくれなかった。僕たちは若干の不安を感じたものの、小池課長があれほど自信満々なのであれば、ここはひとつ全面的に信頼してまかせようという結論に達した。

忘年会当日、部長の「えー。みなさん今年も残すところあと一週間となりました。…それではかんぱーい」という挨拶の後、しばし談笑を経て、いよいよメインの各課の出し物の時間となった。総務課の、小池課長の出番は三番目だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3403p/>

私はOLが嫌い（仮）

2010年12月8日01時55分発行